

野口 宏先生の定年ご退職にあたって

総合情報学部長 木谷 晋市

野口宏先生は、1963年3月に東京大学工学部電気工学科を卒業後、同年4月に東京大学大学院数物系研究科電子工学専修修士課程に進学され、1965年3月に同課程を修了された。引き続き、1965年4月から1966年3月まで東京大学生産技術研究所において助手を務められ、1966年4月より日本電信電話公社電気通信研究所（1985年4月より同公社民営化により日本電信電話株式会社となる）に奉職された。その後、1988年4月からは浜松大学に助教授として赴任され、1992年4月には教授に昇進され、さらに1994年4月には総合情報学部開設にあたって教授として関西大学に着任された。

一般に新しい学部の創設期にはさまざまな混乱が発生するものである。とりわけ総合情報学部は、文理総合を理念としていることから、多彩なカリキュラムを持ち、そのための多様な分野の様々な経験を持つ教員によって構成されていたため、構成員間の意見を調整するには大きな困難を伴った。こうしたなか、野口先生は、開設当時の学部長を支えて学部運営に貢献されると共に、1994年6月から2年間、関西大学大学協議会協議員として全学的な意思決定にも参画された。また、総合情報学部は、1998年4月に大学院総合情報学研究科を開設することになるが、その準備に際して施設関係の責任者として尽力された。

こうしたご多忙ななかでも、野口先生は膨大な研究業績を残しておられる。1987年には『コンピュータ科学と社会科学』、1998年には『情報社会の理論的探究：情報・技術・労働をめぐる論争テーマ』という単著を刊行されており、そのうち後者によって博士（経営学）の学位を中央大学から授与されている。これ以外にも編著・共同執筆・学術論文は多数に上る。総合情報学部の紀要である『情報研究』だけでも、1995年の第2号以来、5号、8号、10号、15号、16号、17号、18号、19号（2003年）及び、28号（2008年）に寄稿され、同誌の発展に貢献されている。

それらの研究の基本姿勢は、本号に掲載した最終講義のなかからも窺えるように、情報社会の将来をより正確に見通すために、「技術」の視点と「歴史」の視点という複眼的な視点で現代を分析するというものであろう。こうした視点は、大学から研究所にかけて磨かれた技術者としての資質と、豊富な読書によって養われた歴史感覚が、独特な感性で統合された所から生まれているように思われる。最終講義においても述べられているように、今後の研究の方向は「これまでのビジネス情報論の成果をベースとしながら、デジタル・ネットワーク資本論という経済学、情報学」である、ということである。壮大な文明論の展開を期待すると共に、野口先生のますますのご健勝と今後のご活躍をお祈りする次第である。